

令和 6 年 6 月 12 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00465

研究課題名（和文）邦訳作品のアジアにおけるリンガフランカ的役割への一考察 邦訳グリム童話を例に

研究課題名（英文）The role of Japanese translations as a lingua franca in Asia using the example of the fairy tales by the Brothers Grimm

研究代表者

西口 拓子（Nishiguchi, Hiroko）

早稲田大学・理工学術院・教授

研究者番号：00459249

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：盛んに翻訳が行われる文学作品は重訳と判明することがある。その場合、ターゲット言語の翻訳テキストにおける変容を考察する際に、介在した言語のテキストの参照も必須となる。世界的にみれば英語を介する重訳が多いが、韓国や台湾においては、初期には日本語訳を底本とした場合が少なくない。その調査研究の一助となるデータとして、オンライン公開された邦訳グリム童話テキストの情報を収集した。これは世界の研究者に利するデータである。また、本研究の調査の際に、これまで知られていなかった明治期のグリム、アンデルセン、ペロウの邦訳を雑誌『児童新聞』（後に『児童教育』『児童世界』と改称）の中に見つけることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

韓国におけるグリム童話の受容研究は盛んであり専門誌Fabulaでも2021年に特集が組まれた程である。本研究で多数の論文を調査したが、たとえば2018年に韓国で発表されたものは、重訳の底本となった邦訳グリム童話テキストを参照していないために、部分的に問題があった。本研究の一環でドイツ語に翻訳した論文は、2022年の刊行であったため間に合わなかったが、今後はそうした誤謬の回避に貢献するであろう。本研究で収集したデータは、韓国と台湾のみならず、世界のグリム童話の受容研究に寄与するもので、今後一般の読者にも利用可能な形に整えていく予定である。

研究成果の概要（英文）：Some translated literary works are retranslations. It is therefore important to consider not only the text in the target language, but also the source text. The most common source text in the world is certainly English. In the early stages, however, Japanese translations often served as source texts in Korea and Taiwan. In order to contribute to international research, we collected the data of old Japanese translations of Grimm's fairy tales, which are now digitalized and uploaded to the Internet due to expired copyright. This research led to the discovery of some early translations of fairy tales by the Brothers Grimm, Andersen and Perrault in a Japanese children's magazine without attribution.

研究分野：ドイツ文学、翻訳文学

キーワード：メルヒェン 翻訳 グローバル アジア グリム童話 受容 翻訳文学

1. 研究開始当初の背景

日本における西洋文学の翻訳は、初期には英語経由で行われたケースが目立つが、韓国や台湾において少なくなかったのが日本語訳経由である。しかしながら翻訳底本の確定には日本語(原語および媒介言語)の読解力のみならず資料も時間も要するため実証的な研究は少ない。本研究が主に調査対象としているグリム童話の場合、明治から大正期の邦訳は、英語経由のものが多く、大胆な変更がなされた翻案も多い。原典から異なる箇所が、特徴として翻訳文に痕跡として残る。更なる重訳となる韓国語訳や中国語訳に邦訳と同一の特徴がみられる場合には、翻訳底本がその邦訳であることの証左となる。今後こうした実証研究が必要となることは必至で、その基礎資料のデータを収集し、それをデータベースとしてまとめることを目指した。

本研究の端緒は、グリム童話の受容研究への熱が世界的に各地で高まったことがある。契機となったのは、2012年にドイツのカッセル大学で開催された国際学会で、『グリム童話集(子どもと家庭のためのメルヒェン集)』の初版(第一巻)が刊行された1812年から200周年を記念したものであった。

2. 研究の目的

翻訳を介した受容研究は、ターゲット言語毎に個別に行われる向きがあるため、それらを有機的につなぐことを目的とした。こうした研究を積み重ねることで、アジアにおける文化的つながりの一端を示すことができ、それは現在の我々の文化交流を支える礎ともなるだろう。初期の西洋文学の翻訳においては、韓国や台湾においてはこれまで知られている以上に日本との繋がりがあったのではないかという観点から、基礎となる資料を調査しデータベースとしてまとめるのが本研究の柱のひとつであった。

初年度にはドイツの研究者から、明治期の邦訳グリム童話の挿絵の画像を利用したいという相談を受けた。こうした(日本語の知識を必要としない専門領域の研究に従事する)研究者に供するデータベースを作る必要性を、研究期間中に実感することとなり、これも目的となった。

3. 研究の方法

日本において公開されている資料(具体的にはグリム童話の初期の邦訳で、オンラインにPDF等で公開されている資料)のデータを収集した。その中には、グリム童話ではない話も紛れ込んでいる場合もある。また、加筆の度合いが強く、翻訳というよりも翻案と呼ぶべきものも含まれていることもある。そうしたものも含めて収集を行った。

当初は、データの一部は「国立国会図書館内/図書館送信」となっており、アクセスが難しいものも多数あったものの、2022年5月より絶版本などを中心に「個人向けデジタル化資料送信サービス」が開始され、個人が利用者登録を行うことで閲覧可能な資料の数が飛躍的に増えた。

閲覧区分の最新の状況を確認しながら、データベースの基礎となる情報の更新を行った。こうした閲覧可能なデータは今後も増える予想される。それに対応して追記可能な形でデータを公開する予定である。

なお海外での学会発表や研究交流の際には、海外の研究者の助力を得て、それらオンライン上のデータがドイツやオーストラリア等からもアクセスが可能であることを確認した。

4. 研究成果

アジアでもとりわけ韓国におけるグリム童話の受容研究は盛んであり、専門誌Fabulaでも2021年に特集が組まれた。本研究では、韓国の受容研究にとって重要な厳基珠論文を“Rezeption der „Kinder- und Hausmärchen“ in Korea am Beispiel von „Tongmyǒng“”(Aus dem Japanischen von Hiroko NISHIGUCHI)としてドイツ語に翻訳した。本稿は1923年に雑誌に掲載された韓国語訳グリム童話の底本が、邦訳であったことを実証的に示した論考である。その可能性は既に言及されてはいたものの、実証されてはいなかったのである。

この論考の重要性は、本研究において韓国の研究者が発表した論文を多数調査した際にも確認することができた。たとえば2018年に韓国で発表されたものは、重訳の底本となった邦訳グリム童話のテキストを参照していないために、部分的に問題があった。先の厳論文のドイツ語訳は、2022年の刊行であったため間に合わなかったわけであるが、今後はそうした誤謬の回避に貢献するであろう。

コロナ禍であったため、海外の研究者とは主にZOOMを介した研究交流を行った。とりわけ韓国の研究者とは、先のドイツ語翻訳論文を拡充すべく議論を行った。

2024年初頭にはドイツの研究者とも現地で研究交流を実施することができ、本研究の成果を今後ドイツでのワークショップ等で公開する準備を行った。

本研究で収集したデータについては、複数の国際学会発表や講演で周知を行ってきたが、その際の反応からみても各国での利用 韓国と台湾のみならず、世界のグリム童話の受容研究に寄与できると考えている。ドイツの研究者とは、今後これを利用した研究交流を続ける予定である。また、国際学会においては、本研究のデータベースの海外からの利用に関する意見交換も

行った。近年 Google レンズなどの（解析・検索・翻訳などのための）ツールが簡単に利用できるようになり、PDF 化された資料の言語が読めない場合にも、ある程度の内容が把握できるようになった。つまり、いわば必要な資料に辿り着くことができれば、Google レンズ等を通して日本語の資料の「概要」を把握することが現在では可能であり、主にアジアにおける国際的な影響関係を挿絵を手がかりとして調査する際には、本研究のデータベースの有用性は高い。（挿絵が受容研究の手がかりになることは、拙著『挿絵でよみとくグリム童話』で示した。）この点からも世界での受容研究への貢献を期待している。さらに広く一般の読者が挿絵などを鑑賞できるようにデータを整える。オンライン上に（PDF などの形で）公開される資料は今後増加が見込まれるため、新たな情報を追加できる形で公開する。

加えて、データベース作成のためにグリム童話の邦訳の悉皆調査を行った際には、これまで知られていなかった明治期のグリム童話の邦訳を新たに発見した。それが平凡社の創業者でもある平中弥三郎が編集に携わった『児童新聞』（のちに『児童教育』『児童世界』と改称）に掲載されていた、グリム、アンデルセン、ペローの童話の邦訳やアラビアンナイトの抄訳である。その中には本邦初訳も含まれており、この発見は研究史上においては、2015 年の府川源一郎氏によるグリムとアンデルセンの童話の新発見に続くものとなった。『児童新聞』『児童教育』『児童世界』の巻頭言からは、読者数が徐々に拡大し、韓国や台湾でも読まれていた様子も窺い知ることができる。海外からの日本語での投稿も掲載されていた。これは受容研究の今後の基礎資料のひとつとなるものである。この内容を『下中彌三郎と『児童新聞』とグリム童話 新たに見つかった明治期のグリム・アンデルセン・ペローの童話の邦訳をめぐって』にまとめた。もう一本の論文『石橋思案とグリム童話 明治期グリム童話の翻訳から』では、博文館の児童雑誌の中に掲載されたグリム童話の翻訳のうち石橋思案が手がけたものについて論じた。博文館の雑誌は、先の『児童新聞』より多くの読者を獲得し、現在は復刻版も刊行されているほどの雑誌である。韓国等でも『児童新聞』以上に読まれていたことが想定され、今後も研究の発展が期待できる。これら論文のうちオープンアクセスの『翻訳文学の挿絵の系譜』は、邦訳に添えられた挿絵を江戸時代からの流れでとらえつつ、邦訳が韓国で底本として使われた経緯も紹介した。

その他ドイツ語でも二本の論文を執筆した。一本は、ドイツのランダウ大学のローター・ブルーム教授との共著の „weil sich hier kein so naher Zusammenhang äußert“: Grimms Märchen in Japan zwischen Mündlichkeit und Schriftlichkeit“ で、ドイツ語で執筆したが、英語の翻訳（比較的長い抄訳）も付けた。日本で口頭で伝承される話の中にも、もとは書物に掲載されたもので、ドイツなどヨーロッパから伝わった話もある。こうした書物を介した伝播は、重訳のケースと比較することが可能である。明治時代に編まれた多数の子ども向け読本の底本についても論じたが、これら読本も、日本のみならず海外でも読まれた可能性がある。本論考はオープンアクセスではないが、電子版は契約した図書館で閲覧が可能となり、英語訳も付けたために研究者にはアクセスが容易な形で公刊することができた。もう一本の “Ohne Vorlage keine Nachbildung. Englische Grimm-Ausgaben im Spiegel japanischer Übersetzungen der Kinder- und Hausmärchen“ (単著)では、日本のグリム童話翻訳研究において、英語訳がいかに重要であるかを論じた。本論考では日本におけるグリム童話の受容研究が、ドイツを中心とする世界でのグリム童話研究にとってどのような貢献の可能性があるのかということも示した。英訳グリム童話に関しては Martin Sutton らの先行研究もあるが、一世紀以上前の英訳書については現物が残っておらず、初訳の刊行年でさえ明らかでない場合もある。ところが日本でその挿絵が模倣され刊行されている場合には、その英訳が少なくとも邦訳の刊行年以前に存在していたことになる。そうして初訳の刊行年がこれまで知られていた以前に遡ることを本論考では実証的に示した。このように日本で翻訳底本として使われた英訳書は、広くアジアで使われた可能性を秘めており、今回作り上げるデータベースが今後の受容研究の発展に広く寄与することを期待している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 西口拓子	4. 巻 1
2. 論文標題 翻訳文学の挿絵の系譜	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Practicing Japan. 35 Years of Japanese Studies in Poznan and Krakow	6. 最初と最後の頁 269-286
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.48226/978-83-67287-73-9	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 西口拓子	4. 巻 64
2. 論文標題 石橋思案とグリム童話 明治期グリム童話の翻訳から	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 人文社会科学研究	6. 最初と最後の頁 1-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西口拓子	4. 巻 63
2. 論文標題 下中彌三郎と『児童新聞』とグリム童話 新たに見つかった明治期のグリム・アンデルセン・ペロウの童話の邦訳をめぐって	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 人文社会科学研究	6. 最初と最後の頁 67-119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Lothar BLUHM, Hiroko NISHIGUCHI	4. 巻 130
2. 論文標題 "weil sich hier kein so naher Zusammenhang aeussert": Grimms Maerchen in Japan zwischen Muendlichkeit und Schriftlichkeit	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Explorations into Language, Literature and Culture. DASK - Duisburger Arbeiten zur Sprach- und Kulturwissenschaft / Duisburg Papers on Research in Language and Culture	6. 最初と最後の頁 393-420
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3726/b20630	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 7件）

1. 発表者名 西口拓子
2. 発表標題 翻訳におけるテキスト変容の諸相 西洋児童文学を例に
3. 学会等名 Japan: Pre-Modern, Modern, Contemporary September 1-3, 2023 Bucharest University of Economic Studies, Center for Japanese Studies, (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 西口拓子
2. 発表標題 Widerstand einer Prinzessin: Der Fall "Froschkoenig"
3. 学会等名 German Studies Association of Australia Conference: Widerstand/Resistance (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 西口拓子
2. 発表標題 反ユダヤ的傾向のある童話の日本での受容
3. 学会等名 International Symposium on Japanese Studies Urban Culture and Nature in Japan (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 西口拓子
2. 発表標題 邦訳グリム童話がつなく世界の文学 オデュッセウスと「韓信の股くぐり」
3. 学会等名 “Japan: Pre-modern, Modern, and Contemporary”, “Dimitrie Cantemir” Christian University, Bucharest (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 西口拓子
2. 発表標題 「アラビアンナイト」からアンデルセンまで 明治期の児童雑誌の試み
3. 学会等名 International Symposium on Japanese Studies (Re)-imagining and (re)-translating Japanese culture, The Center for Japanese Studies of the University of Bucharest a.a. (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 西口拓子、石井道子、野田農
2. 発表標題 ものがたりの国境を越えるモビリティと持続可能性
3. 学会等名 Japanese Studies Association of Australia Conference 2021 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 西口拓子
2. 発表標題 翻訳文学の挿絵の系譜 オンライン上の公開資料を活用した研究
3. 学会等名 Practicing Japan; 35 years of Japanese Studies in Poznan and Krakow (国際学会)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 西口拓子	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Wissenschaftlicher Verlag Trier	5. 総ページ数 19
3. 書名 Polyphone Literatur, Bd. 1, 論文タイトル Ohne Vorlage keine Nachbildung. Englische Grimm-Ausgaben im Spiegel japanischer Uebersetzungen der Kinder- und Hausmaerchen	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	石井 道子 (Ishi Michiko) (20222953)	早稲田大学・理工学術院・教授 (32689)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
ドイツ	カッセル大学	ランダウ大学		
スイス	チューリヒ大学			
韓国	ソウル女子大学	慶北大学校		